

人類の誕生から探る歯科治療

講師

国際マイオドンティクス学会副会長
元城東歯科医師会会長

財部 洋 先生 (62回卒)

略歴

昭和48年 日本歯科大学 卒業(62回卒)
歯学博士
国際マイオドンティクス学会副会長
元城東歯科医師会会長

主な著書

「マイオドンティクスの臨床 - スプリントの実際 -」クインテッセンス社 1987
「咬耗と人類生物学的現象 - 人類の誕生から探る歯科治療 -」
デンタルダイヤモンド社 2024



チンパンジーと共通の祖先と分かれて700万年、豊かな森から出た人類は歯をすり減らして生きながらえてきた。それを支えてきたのは、シンメトリーな歯列を持つ鉗子状の咬耗咬合である。

ヒトの特徴は、直立2足歩行と犬歯の退縮である。ヒトのこの特徴は、動物の中でもかなり珍しいもので、頭を背骨の上に載せて立って二本足で歩く動物はヒト以外にいないし、牙をなくした霊長類もヒト以外にいない。さらに小さくなった犬歯は他の咬耗した歯に合わせて尖頭をなくし、上下切端同士で噛み合う平らな歯列を持つようになった。鉗子状の咬耗咬合である。

人類の祖先である初期の猿人がさらに猿人、原人、旧人、新人と気の遠くなるような時間をかけて進化していく中で完成された咬耗した歯列を持つこの鉗子状咬合は縄文時代まではごく普通の咬合様式であったが、つい最近の弥生時代以降、いやそれよりもっと最近、その咬耗現象をなくして鉗子状咬合から缺状咬合に変化した。現在の歯科学ではこの缺状咬合が正常咬合と言われている。

私は臨床50年の中で崩壊された咬合を持つ患者さんの治療を数多くこなしてきました。そしてこれらの症例を通して、現在の歯科学で抱えていることの矛盾や問題点が浮き彫りにされてきました。今回先生方にどのようにして崩壊された咬合を治したのか、そしてその結果何が起きたのかを見ていただき、人類が培ってきた鉗子状咬合と現代人の持つ缺状咬合から現代歯科学の盲点についてお話できればと思っています。

今回の話は臨床での事実で、その事実からの人類学的な当たり前の考察です。「なるほど」と相槌を打っていただけたら幸いです。